

# 永遠の情景

中嶋 正敏

この稿を書いている今は秋本番である。職場のそばにはどんぐりのなる木々があつて、毎年おびただしい数の実が秩序なく路面に散乱しては、嬉々としてそれらの後を追う子どもたちの光景を目にする。どんぐりにはいろいろいな形があり、眺めているだけでなんとなく楽しいものだ。マテバ

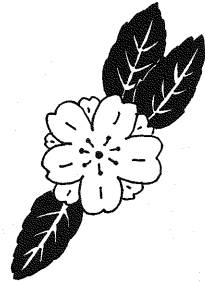
シイの実などはフライパンで炒めればピーナッツみたいに香ばしく、つまみとしてもなかなかのものである。そんな意味で大人でもちよつとワクワクとさせるその光景が、毎年毎年飽きもせず今の時期にきちんと再現されることに気づくにつけ、これはもしかしたら今後もずっと繰り返し続いて

いく光景なのかとも思い、そして、自分はまた一つ確実に歳を重ねたことを実感する。

木々は大きく枝を張り、堂々としてとても誇らしげである。樹齢何年なんだろうか、などと思いを巡らせてみたりもする。だがそういうえば、そもそも植物はなぜ大きくなるのだろうか。そんな「あたりまえ？」なことも突き詰めて考えていくと実はちゃんとはわかっていない。ちよつと専門的な話でとつつきにくいかもしれないが、植物が成長する過程においては普段、必要以上に大きくなったりしないように、平たく言うところの「つつかえ棒」の役目をするものがある。大きくなれ、という時にはその「つつかえ棒」が減り、逆にそれがあるうちは決して大きくなれない。だから例えばこの「つつかえ棒」がすべて壊れてし

まったら、ひよろひよると細く丈の長い植物になり最後はパタンと倒れ絶えてしまう。そんなバカなことにはなりたくないハズだから、「つつかえ棒」は懸命に頑張っているのだ……。

そんな講釈を垂れていると、まんまと子どもに言われてしまった。「植物は根から水を吸って、太陽の光を浴びて大きくなるんだよ……パパ、そんなことも知らないの?」。嘩然、呆然。これは「木を見て森を見ず」なのか。子どもというものはそのも何ら臆せずモノを言い、珍妙? な発想でも一向にお構いなく次々と披露してくれる。「無限の可能性」とはよく言ったものだ。知らないだろうなんてこちらが高をくくっている、実は子ども特有の眼でいろいろなことが極めてよく見えているものであるらしい。



ればさらにその先を知りたくなる。どんどん狭いところへ入りこみ、先にはわかれ道がいつぱい現れる。そうやって気がつくといつしか迷路に陥り、迷ったりしているうちに例の「つつかえ棒」は無惨に壊れ、成長と共にすっかり「森」を見ようとしないうちになるのかもしれない。

植物も人も根元は同じだ、などと考えるのはいささか乱暴かもしれないが、もしかして子どもの頃は敢えて木を見ないでも済むように「つつかえ棒」がからだのどこかに配されているのかしら。

だから、『子どもにとつては極めて自然に「森」がよく見えていて、やがてそれが「林」から構成されていることを知り、そしてその中にある「木」の感触になじむにつれて次第に「森」が見えにくくなっていくのかも』なあって全くもって大人の視点で理屈をつけてみた。細かい部分を知

「つつかえ棒」は一度壊れたらもう後戻りできない。子どもの感覚は容赦なく剥げ落ちていく。おびただしく路面にころがるマテバシイを懸命に追いつき、一杯になったポケットを見せながら得意満面の笑顔でなおも駆けずり回る子どもたちの眼。いつ果てるとも知れないその光景の中に、言い表せないほどのまぶしさを感じる瞬間でもある。

(東京大学)